



田無神社

霜月

第41号

特別カラー号

文化財特集号

発行所
田無神社社務所

〒188-0011
東京都西東京市田無町3-7-4
TEL 042-461-4442

写真撮影
編集発行人
賀陽智之

令和6年 本殿拝観会中止のお知らせ

昨年まで、11月の酉の日に合わせて、東京都の文化財ウィーク事業の一環として、本殿拝観会を実施してきましたが、今年
は中止といたします。

本年は「辰年」にあたり、日本各地から大勢の参拝者がお越し
いただいたしており、本殿拝観にも多数の方がいらつしやること
が予想されますが、社殿に一度
にご昇殿可能な人数に限りがあり、混乱が生じる可能性がある
ことを鑑み、やむなく中止を決
断することにいたしました。ぎ
りぎりまで開催の可能性を探っ
てまいりましたが、上記の状況
を踏まえ、このような判断をせ
ざるを得ないことになりました。
本殿拝観会を楽しみにしてこ
られた皆様のために、社報41号
を文化財特集号として発行いた
します。本社報では、本殿拝観
会でご覧いただく予定であった
「本殿・拝殿」を始め、その他
文化財について詳しく解説をし
ております。

田無神社の文化財

本殿・拝殿は平成12年に東京都指定文化財（建造物）に登録され、その後、平成30年に特に景観上重要な歴史的建造物等（東京都景観条例）に選定されました。参集殿は平成16年に国登録有形文化財（建造物）に登録されました。金箔で仕上げられている獅子頭（雄獅子・雌獅子）は西東京市の文化財に指定されています。社殿向かつて左の銀杏のご神木は西東京市の天然記念物に指定されています。

※「特に景観上重要な歴史的建造物等（建造物）」は、文化財など歴史的な価値のある建造物等のうち、その建造物等を含む周辺の良い景観の形成に特に



本殿

重大な影響を与えるものを選定するものです。令和6年1月現在、ニコライ堂、日本銀行本店本館など80カ所が選定されております。

資料について

『彫工嶋村俊表の美 田無神社本殿写真集』（平成7年発行）、東京文化財ウィーク20000参加企画で知事賞を受賞した『田無神社本殿の美』（平成12年発行）、『写真と資料から見る田無神社』（令和4年発行）に、本殿・拝殿の彫刻が詳しく解説されています。

御遷座三五〇年記念誌

『写真と資料から見る田無神社』

令和2年10月11日御遷座三五〇年大祭が斎行され、田無神社は大きな節目を迎えました。本誌は鎌倉時代の創建から今日まで人々の祈りを紡いできた歴史について、神社に残された記録、氏子・崇敬者の方々や研究者の皆様よりお寄せいただいた膨大な資料を分析し、考察を加えて取りまとめました。貴重な写真や資料が盛りだくさんに掲載されています。フルカラーA4判並製カバー。田無神社社務所で3,000円（税込）で販売しております。

本殿について

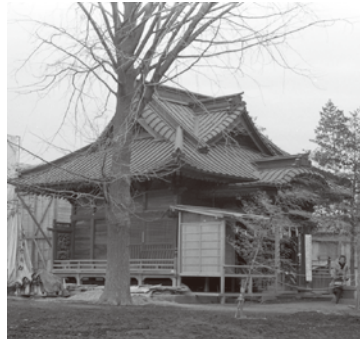
建築年 安政5(1858)年

覆殿

本殿は社殿の奥深くに鎮まり、鉄筋コンクリート造の覆殿に囲われています。境内から拝殿越しに遠く仰ぎ見ることはできませんが、拝殿のさらに奥にある本殿は、暗闇の中におぼろげに、幽かにしか見ることが出来ません。現在の覆殿は昭和47年に完成しました。覆殿の竣工日には、お神輿が田無の町を練り歩き、さながらお祭りのようだったそうです。

鉄筋コンクリート造の覆殿の完成前までは、木造の覆殿によって守られていました。本殿が江戸期に造られた姿そのままに残しているのは、古くから覆われ、直接の雨や風、日の光から守られてきたことの結果に他なりません。反面、このように秘蔵されてきたことにより、本殿の彫刻の価値が世間にはほとんど知られてこなかったことも事実です。平成7年に自費出版された「彫工嶋村俊表の美 田無神社本殿写真集」により注目されはじめましたが、東京都の本格的な調査が入ったのは平成11年からでした。この調査の結果

により、本殿ばかりか、拝殿についても東京都の文化財に指定される運びとなりました。



覆殿工事の様子(昭和42年)

寸法と材料

本殿の規模は身舎桁行柱間4尺3寸、梁行柱間3尺8寸7分、身舎から向拝柱間3尺8寸7分、棟高は5・04m、建物面積8・03㎡と実測されます。江戸の堂宮建築の高度な水準を示す貴重な建物です。

本殿は入母屋造りの銅板葺きで、唐破風、千鳥破風をあしらった素木の総檜造の江戸後期の神社様式の社殿です。唐破風とは頭部に丸みをつけて造形した、屋根にある破風のことで、千鳥破風とは屋根の流れ面に起こした三角形の破風

のことを指します。入母屋造りとは側面から見て上部が切妻屋根、下部が流れ屋根になっている建物のことを指します。身舎下は石造の亀腹、向拝下は布石基礎で、その上に土台が乗ります。亀腹とは、社寺建築の基礎周辺部等で、漆喰で盛り上げて造られた饅頭形のものを指します。身舎土台には八角柱が立ち、台輪を配して、腰組三手先にて縁葛と大床を支えています。正面に幣軸構え、棧唐戸の両開き扉が付いています。棧唐戸とは、四周の框と縦横の数本の棧を組み、棧と框の間に入子板を嵌め込んだ扉のことです。向拝柱は角柱で、水引虹梁、繫ぎ虹梁が架かっています。身舎の胴羽目、木鼻、虹梁など、柱や長押といった構造材に至るまで、各所に彫刻が施されています。彫刻数は、建造時に記された「尉殿権現普請請負一札」及び「尉殿権現彫物積帳」に147点であると記されています。



本殿(正面)下から

身舎妻飾りは四方とも、大斗・虹梁・墓股で、化粧棟木隠しとして懸魚が付きます。墓股とは、梁・桁に設置し、荷重を分散して支えるために、下側が広くなっている部材のことを指します。そのシルエットが蛙の股の様に見えることから墓股と呼ばれるようになります。した。虹梁は向拝水引虹梁が流水紋で飛雲籠彫根肘木付き、繫ぎ虹梁は飛龍籠彫で右が上がり龍、左が下がり龍です。籠彫とは、内部にも透かし彫りをして立体的に仕上げることを言います。根肘木とは、柱にとりつけた虹梁を支えるため柱に差しこんだ材のことを指します。身舎二重軒支輪は上が飛龍、下は植花流水、琵琶板には鳥また腰組琵琶板には亀、腰組柱間には麒麟(一角獣)が配されています。軒付には一重軒付と二重軒付があり、二重軒付は一重軒付に比べて軒の出を深く優雅に見えることができます。軒の斗栱部分や折り上げ天井で、斜めに立ち上がって並列している弧状またはS字状の材を支輪と言います。虹梁とは虹のように上方に反りを持たせてある梁のことを指します。

嶋村俊表

尉殿権現普請請負一札には、本殿は安政5年に造られ、棟梁は多摩石畑村の鈴木内匠、脇棟梁同玉吉、彫工として江戸浅草平石衛門町の嶋村源蔵が手がけたと記されています。

本殿背面の大羽目彫物の刻名や、田無神社宮司家の賀陽家祖霊社に祀られる賀陽玄雪像から、嶋村源蔵とは、嶋村俊元を祖とする嶋村家の八代に当たる「嶋村俊表」のことであるとわかります。源蔵とは、嶋村家当主が代々世襲した幼名です。嶋村家は当時、石川家(下谷)、後藤家(京橋)と共に「江戸彫物大工御三家」に数えられ、幕府の官工といわれていた名家でありました。『彫工左氏後藤氏世系図』等によれば、嶋村家は万治寛文頃の人である「俊元」を元祖とし、二代圓鉄、三代俊実と続きます。その他、本家以外の嶋村姓を名乗る彫刻大工が活躍しており、嶋村流という一派を成していたと思われまふ。現在の、東京、埼玉、茨城、千葉といった関東東部が嶋村家一派の活動範囲であったと考えられます。

彫刻家であり、建築の装飾彫刻である彫物から離れ、芸術家としての彫刻家の道を歩みました。嶋村俊表は川越氷川神社本殿(埼玉県指定文化財)、成田山新勝寺釈迦堂(国重要文化財)、賀陽玄雪像(賀陽家所蔵)等を手がけた江戸後期の天才彫工です。さらに、千葉県の勝浦市には、「勝浦市本町屋台」、「富士山に龍」、「えびす・大黒」等、嶋村俊表が手がけた多くの作品が残っています。嶋村俊表の作品を勝浦市が所蔵していることが一つの要因となり、西東京市と勝浦市の間で、平成15年に友好都市の提携に伴う盟約調印式が行われました。

田無神社本殿は俊表が晩年に手がけた作品であり、円熟期の卓越した技量が見事に発揮された代表作です。本殿には龍や猿、象、獅子、二十四孝の彫刻、繊細で多様な地紋彫りが建物の隅々にまでどこどこされています。地紋彫りは種類も多様であり、身舎円柱、地長押、上下内法長押、台輪、腰組八角柱、縁葛大床廻り縁木口、隅木先端の木鼻、擬宝珠柱と高欄の各部材、脇障子袖柱、笠木、向拝柱、水引虹梁、菖蒲桁、軒唐破風の化粧棟木、浜縁土台、縁束、隅木、葉紋や卍崩し紋が施されており、建

物をさらに一層賑やかにしています。

浜縁の鯉

正面最下部の浜縁には鯉、側面には滝、上にはたくさん龍が彫られています。これは、鯉が急流の滝を登り、天まで昇って龍になる「登竜門」の構図です。

建築費について

川越氷川神社本殿は総工費約二千両、成田山新勝寺釈迦堂は約一万八千両であったとされます。田無神社本殿の彫刻を俊表は百三十五両という破格の安値で請け負いました。本殿の建築費は、地域の人々から奉納金を募らず、田無村の名主下田半兵衛の個人財力によるものでした。推測になりますが、俊表が、破格の安値で請け負ったのは下田半兵衛の心意気を汲んだからではないでしょうか。



賀陽玄雪像



浜縁の鯉



繋ぎ虹梁

二十四孝図について

本殿の壁面には二十四孝図が彫られています。二十四孝は元の郭居敬がまとめた、後世の範として孝行が特に優れた人物24人を取り上げた書物です。日本にも伝来し、御伽草子や寺子屋の教材にも採用されています。田無神社本殿には二十四の道徳のうち、大舜図（本殿東面）、楊香図（本殿西面）、姜詩図（本殿北側）が選ばれています。

「大舜図」東面の彫刻

「大舜」は孝に厚く、徳の高い舜を見込んで、時の皇帝の堯が帝位を舜に禅譲したという話です。本殿には、象や鳥が舜を助け、畑を耕す場面が彫られています。

※田無市立中央図書館発行の資料集「田無神社(2)」(25頁)に大舜図の写真とキャプションが掲載されています。そこには本殿の「大舜図」には「人の悪夢を食べる動物」が彫られていると記載されていますが、実際には夢を食べるとされる獺ではなく象が彫られています。

「楊香図」西面の彫刻

「楊香」は襲つてくる虎から父親を助ける女の子の勇氣と孝行を描いたものです。楊香は父と山に入

った際に虎に遭遇しました。父の命を守るために追い払おうと天に自らを犠牲にし、「父を守り給え」と祈りました。すると虎が逃げいき、無事に父子で家に帰ることが出来たというお話です。

「姜詩図」北面の彫刻

「姜詩」は妻の龐とともに母に仕え、母の好む江水をくみ、なますを作つて饗したところ、庭に江水に似た味の湧水が湧いて、毎朝二尾の鯉をもたらしただという話です。貴人が柄杓で水を汲む姜詩に出会う場面が彫られており、湧き水をテーマにしています。

正面(南面)の彫刻について

『彫工嶋村俊表の美 田無神社本殿写真集』では本殿正面(南面)の図は「養老孝子図」であるとしています。『田無神社本殿の美』では、本殿北側と同じテーマの「姜詩図」であるとしています。

「養老孝子」は、岐阜県養老郡に伝わる孝子の物語です。貧しい孝子が酒を好む老父を養うために薪を採りに山に入り、酒の滴(または泉)を発見して、「瓢箪」を用いて老父に与えるという日本の伝説です。「養老孝子図」も「姜詩図」も、泉か

ら水を汲む場面が彫られているので見分けがつきにくいですが、私は本殿正面の彫刻は「姜詩図」より「養老孝子図」の方が可能性が高いと感じています。

なぜなら、俊表が、二つの似た構図の作品を、「瓢箪」と「鯉」の有無で、異なる作品として描き分けている可能性があるからです。本殿正面(南面)の図の水を汲む人の手には「瓢箪」が彫られていますが、北側の図(姜詩)では「瓢箪」

がありません。また、本殿正面(南面)の図の泉には「鯉」がいますが、北側の図(姜詩)では泉に「鯉」が泳いでいます。今まで氏子・崇敬者の皆様に、『田無神社本殿の美』に従い、田無神社本殿として本殿正面(南面)の作品は姜詩図であるとお伝えしてきましたが、本殿正面の作品は「養老孝子図」・「姜詩図」両方の可能性があるかと改めさせていただきます。

テーマについて

二十四孝の中で「水」をテーマに扱っているのは姜詩だけです。また、養老孝子の伝説も「水」に関連する伝説です。本殿正面(南面)、本殿裏側(北面)と主要な二箇所

に彫られているということから、「水」が彫刻のメインテーマではな



地紋彫り(身舎柱)



地紋彫り(虹梁端部)



地紋彫り(向拝柱)

田無神社本殿の二十四孝図



だいしゅん
「大舜図」 ヒキ



だいしゅん
「大舜図」 ヨリ



よこう
「楊香図」 ヒキ



よこう
「楊香図」 ヨリ



しやうし
「姜詩図」 ヒキ



しやうし
「姜詩図」 ヨリ



「正面の彫刻」 ヒキ



「正面の彫刻」 ヨリ

拝殿について 建築年 明治8(1875)年

拝殿は明治8年の建築で、造営は地元大工の高橋金左衛門、中村儀右衛門、尾林勘次郎によるものです。拝殿の彫刻群の美しさは、本殿のそれに迫るものであり、おそらく嶋村俊表を意識して造営されたものと推測されます。とりわけ、向拝、脇障子の彫刻は、大胆且つ繊細で美しく素晴らしいものです。また、拝殿左右の木鼻の角と翼を持った龍の彫物の精巧さには驚かされます。向拝とは社殿の屋根の中央が前方に張り出した部分を指します。脇障子とは回り縁の終端に設けられた、つい立て状の仕切りを指します。

拝殿内の欄間に、春夏秋冬それぞれの季節がテーマになった彫刻があります。春の彫刻は書初めの様子が彫られています。夏の彫刻に牡丹の花が彫られています。秋の彫刻には祭りの山車ひきの様子が彫られています。冬の彫刻には唐子たちが犬型の雪だるまを作っている様子が彫られています。地元大工が携わった拝殿内の彫刻群には、それぞれ1つ1つに奉納者名が記されています。本殿は神様がお鎮まりになる場所であり、拝殿は地域の人々が神様に感謝し拝む場所です。本殿の建築は幕府の官工の俊表が、拝殿は地元の匠

拝殿の彫刻



脇障子(回廊右奥)



脇障子(回廊左奥)



拝殿内部



入口の神額

人が手がけたことには当時の人々の強い思いがあるのではないのでしょうか。拝殿の造営は、地域の繁

がりの強さ、人々の信仰心の深さ、地域の大工技量が高い水準であることを表しています。



鳳凰と龍



拝殿とご神木



翼を持った龍の彫物



唐獅子ぼたんに牡丹



夏の彫刻



春の彫刻



冬の彫刻



秋の彫刻



こうはい
向拝の彫刻



こうはい
向拝柱の龍



こうりょう
虹梁上の彫刻



正面扉の彫刻



かえるまた
拝殿の臺股



頭貫下の彫刻



こうはい
向拝下から撮影



おおいでん
拝殿と覆殿の繋ぎ目

参集殿について

それまで賀陽玄雪邸（現J…C O M コール田無）で集会や結婚式
の披露宴が行われていましたが、
昭和10年に参集殿が完成すること
により、その役目を譲ることにな
ります。参集殿の設計は内務省関
連の建築家、施工は八王子の宮大
工であり、総工費で約2千円であ
ったとされます。参集殿は木造の
平屋建てで、瓦葺の建築面積約120㎡
（約37坪）の建物です。近代和風
建築で、式台構えに続き、取次の
間と、三間続きの座敷があり、天
井には神代杉が用いられています。
式台とは、玄関の上り口に設けら
れている板敷のことを指します。
取次の間とは、接客のために玄関
に設けられた畳の空間を指します。
床の間の落とし掛けは、端部を
両側の柱より外側に延ばし、その
上部の蟻壁長押と共に鳥居のよう
に見せています。落とし掛けとは、
床の間の垂れ壁の下端を納めるた
めに取り付ける横木を指します。
蟻壁とは、天井付近の丈の低い塗
りこめた壁を指します。蟻壁天井
とは、蟻壁の下にある長押のこと
を指します。長押とは、柱と柱を
水平方向につなぐ化粧材のことを

指します。
参集殿が建てられた昭和10年頃
には、近在に披露宴をあげる場所
がなく、多くの人々は自宅で披露
宴を行っていました。地域の人々
が神社で結婚式、披露宴を行える
ようになったことは、当時にして
は画期的なことでした。4代宮司
賀陽賢治によると、参集殿の建築
資材は、内務省関連の建築家から、
昭和11年に建設予定となっていた
旧「北白川官邸」使用の端材を授
かったと伝われます。



内庭から撮影



床の間



参集殿入り口



落とし掛け



参集殿上空から

獅子頭

嘉永3(1850)年製作

金箔で仕上げられている獅子頭(雄獅子・雌獅子)は西東京市の文化財に指定されています。この獅子頭は嘉永3年に製作され、その後、元治元年に修復されました。明治政府の神仏分離令により、一時期、この獅子頭は西光寺(現總持寺)に移されますが、戦後、田無神社に戻されました。田無神社境内に神輿庫が竣工するまでは、拝殿の左側納戸に納められていました。

この獅子頭を用い、田無村の上宿と下宿が神楽を競い合い、作物の豊凶を占ったとされています。その後、輦台神輿と共に雨乞いの神輿として信仰されています。

獅子頭を乗せた輦台神輿は二基ありますが、両方担ぐと雄と雌で喧嘩をするということから、どちらか片方が担がれてきました。

いつ頃までこの神輿が担がれていたのかは、大正時代まで輦台神輿が担いでいたと記載のある文献や、戦後に神輿渡御を見たという方もいて、正確なことはわかっていません。

『田無市史第四巻民俗編』(448～449)

頁)に、獅子頭について次のような記述があるので紹介します。

「六根しようじょう、ざーんげ、ざんげと唱え水を被り体を清め、竜神様を呼ぶため神輿を担いで田無神社から谷戸まで練り歩いた。雨乞いの神輿は荒つぽくて近寄れるものではなかった。神輿には田無神社にある獅子頭をかついだ。それは大変に重いものであった。雨が降らずに乾き切った路を歩く神輿担ぎは、しまいにはよろよろになって、沿道の人は勢いつけに水をかけた。田無神社の獅子頭は雨乞いの神様といわれ、そのためお祭りには出さなかった。獅子頭を担いで練り歩くと、どういいうわけか雨が降ったという。もともとは蚕の総仕上りの祭りの悪魔払い、そしてお湿りが順調であるように願いを込めて担いで歩いたものであったという。」

田無市発行『たなしのむかし話』(51～52頁)に獅子頭について次のような記述があるので紹介します。浜中 そのずっと前には年寄りの話だけど、神輿の中に入れて練り歩くんじゃないかと、獅子頭に布が

付いて、その中に五人でも十人でも入って練り歩いたらいい。そうすると布の中でお互いにいたずらし合ってしまうから神輿にしたんだなんて聞いたことがある。大谷 まだ布はあるよ。獅子頭も輿もお宮にあるし。保谷 あの獅子頭は雨の神様で、あれを出すかどうか言っただけで、あんなに雨降ったらしい。矢ヶ崎(妻) そう言うよな。だからあれは昔からお祭りには出さなかったんだ。」

向台小学校発行『向台わたしたちのいきる町』(51頁)に獅子頭に

ついて次のような記述があるので紹介します。
「大祭がよく雨に降られたため、豊作祈願のための獅子がいつの間にか雨乞いのシンボルになり、大きな連台神輿と共に雨乞いに活躍するようになったのです」



獅子頭



本社神輿と輦台神輿



獅子頭輦台神輿

ご神木

ご神木とは、霊木れいぼや神依木かみよりき、勸請木かんにきとも呼ばれ、神域にある神聖な木のことを指します。古くから神は物に依りつき具現化すると考えられ、木には神霊が憑依し宿ると考えられてきました。神社によっては、複数の木々がご神木となることや、神社によっては創建されるより前から、そこに木が存在している場合もあります。関東に鎮座する神社では神木になる木として、松や杉、クスノキ等が比較的多いといえます。田無神社の場合、昭和40年頃からご神木はイチヨウ5本としてきました。

嘉永3年なので、樹齢174年（令和6年現在）となります。西光寺（現總持寺）の樫は、寺の門をくぐってすぐ左手にあり、こちらも西東京市の文化財に指定されています。田無神社境内の残りの4本の御神木もイチヨウの木です。参拝者に青龍の木、赤龍の木、黒龍の木、白龍の木として親しまれています。社殿の裏側の木々はクスノキですが、昭和40年頃までは杉林でした。杉林の中の1本はご神木とされていましたが、落雷により傷を負ってしまいました。倒木の危険から伐木されたこのご神木は、田無への急激な工場移転に伴う地下水汲み上げにより最終的に枯れてしまいました。樹齢300年以上と伝わるこの大木は、当時、新宿伊勢丹屋上からも見えた大木でした。もしかしたら、この杉の木は、田無神社が御遷座された江戸時代初期から存在していたかもしれません。現在この旧ご神木は野分初稲荷神社向かって左側に切り株として残されています。



イチヨウのご神木



イチヨウのご神木と社殿

いえません。木は成長し、ときに枯れ、植樹が行われ、新しく増えることもあります。杜が我々に美しさや情緒といった趣を感じさせるのは、自然の様々な表情を四季の変化が生み出すからです。神職にとつて、変わることはない悠久の自然を保護することは、日々の祭儀と同様に非常に重要な務めと言えるでしょう。これまでも先人たちが自然と共生した生活を営む中で、日本の鎮守の杜は大切に守ら



杉の切り株



社殿と杉(昭和12年)



イチヨウの幹

れてきました。これからも氏子崇敬者と共に、地域との共存を目指し、自然を大切にしていかなければなりません。

田無神社本殿 天才 嶋村俊表の彫刻



龍



鳳凰



身舎軒支輪と琵琶板



御扉の彫刻



身舎こうはいと向拝を繋ぐ小壁の獅子



擬宝珠柱



東面から見上げ



西面から見上げ

田無神社本殿 天才 嶋村俊表の彫刻



猿



象



身舎組物



こすりよう
繋ぎ虹梁



腰組(南面)



本殿(正面)



東面の浜床



東側障子(獅子舞)

田無神社本殿 天才 嶋村俊表の彫刻



腰組の彫刻(麒麟と霊亀)



こすりよう
虹梁と猿、象



こすりよう
虹梁の龍



西側障子(楽士)



身舎正面



身舎組物



腰組(東面と北面)



猿と獅子